

## ロシアにおける「アジア」表象に関する一考察

下 里 俊 行\*

### 要 旨

ロシアの辞事典における「アジア」に関する記述の時系列的変化を析出し、極東の観光グラフィ誌とロック・グループのパフォーマンスを題材に現代ロシアの大衆文化の中での「アジア」表象を検討した。結論として19世紀末以降の様々に範型化された「アジア」表象に並立して、20世紀末の大衆文化の中に断片的であるが新しい表象が浮かび上がっていることを示した。

### KEY WORDS

history teaching 歴史教育 cross-cultural education 異文化理解教育

### 1. は じ め に

昨今、東アジア諸国間の多元的な国際交流が進められているなかで、一国単位の地域研究あるいは文化研究の枠を超え、極東ロシアを含む「東アジア」に関する多元的重層的な視点からの研究が不可欠になっている<sup>1)</sup>。本稿の目的は、旧ソ連のロシア語文化圏、特に極東ロシアにおける「アジア」に関する諸表象のあり方を、東アジア地域の歴史教育・異文化理解教育のためのマルチ・メディア教材開発の視点から検討するものである。つまりアジア地域の専門的研究者ではないが、少なからず「アジア」的なものに関心をもっている人々が、「アジア」およびそれに関連する事項についてどのようなイメージを得ることができたのかを明らかにすることにある。したがって専門的な地域研究史でも「アジア」「東洋」といった語の語源学的研究でもなく、むしろ「アジア」の語とそれに付随するイメージが、近代以降のロシア語テキストを中心とした諸表象の提供者と受容者の文脈でどのような意味をもってきたのかという問題に限定するものである。また、東アジア地域における今日の政治的単位（日本国、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、中華人民共和国、ロシア連邦極東地方、台湾など）についての個別の表象について扱わず、「アジア」「東アジア」といった言葉がつむぎ出す諸表象の文化史的変遷に焦点を当てて検討する。具体的には19世紀後半から現代に至るロシア言語語辞典での記述をアカデミズムにおける言語的規範として、百科事典での記述を学術的規範として考察し、またポスト・ソビエト期の大衆文化の一側面として観光グラフィ誌とロック・グループのパフォーマンスを分析した。なお引用の出典は〔文献番号、巻数:頁数〕の形式で示した。また引用訳文における〔 〕内は筆者による補足を示すものである。

---

\* 社会系教育講座

## 2. 言語辞典での記述

ダーリ『現用大ロシア語詳解辞典』（初版第1巻1863年，クルトネ編第3版第1巻1903年）

まず19世紀の代表的な辞典としてV.ダーリ編纂『現用大ロシア語詳解辞典』を検討する。この辞書の性格は、若干複雑である。ダーリ自身による初版（1863-66年）は、19世紀前半に国境要塞都市オレンブルグと古い商都ニジニイノヴゴロドなどで民衆の間で使われていた語彙を集成したものであり、その意味ではアカデミズムの文語的世界とは相対的に異なる日常的口語的コミュニケーション空間を再現したものである。ただしこの辞書の編纂の功績によりダーリが帝国科学アカデミーからロモノソフ賞と名誉会員の称号を授与されて以降、彼の辞書はアカデミズムにおけるある種の規範性を獲得したと見なすことができる。「不適切な」語彙を削除するなどしてこの規範性を強めたのが第2版（1880-82年）であり、自ら採集した語彙も含めその逆の方向を志向して増改訂されたのがクルトネ編の第3版（1903-1909年）である。

初版からある「アジア」という語根を含む語彙は次の二つである。

アジャートカ：オリョール県で採録，サラファン的一种。アジア・ムギ：植物，*Hibiscus syriacus*。[1,1:17]

サラファンとはロシアの伝統的な女性用の衣装である。アジャートカとは絹製の室内着で19～20世紀初頭にオリョールなどで若い女性の晴れ着として用いられた[41:17]。したがって舶来の高級品のイメージが付随していると推測することができる。これらの語が指すモノに付随する「アジア」イメージの具体的内容は不明であるが、少なくともソビエト時代以降の辞典にはない語彙である。ちなみに中国（キタイ）に関わるものとして「キターイカ：普通の木綿の織物，使い初めは微かに黄色かかっており，中国から輸入されたもの」[1,2:279]という項目がある。現代の百科事典では、同じ「キターイカ」は「中国からロシアに輸入された絹織物」[24:533]であり、ロシアに入った中国産品の変化に相応した語義の変容を示している典型である。続いてクルトネによる増補分は次の2項目である。

アジア人 [aziyat, aziat]：アジア出身者（罵倒語）粗野で無教養な人，*aziyatets*，アジア出身者。

アジア的 [aziyatskii]：アジアに属している，アジアに固有の；野蛮な，粗野な。[1,1:17]

この2項目の記述の典拠として示されているのは、筆者未見の帝国科学アカデミー第2部編纂『ロシア語辞典』（1891年）である。

以上のことから口語の次元では19世紀中頃から20世紀初頭にかけて「アジア」という語に付随するイメージが、モノの形容から人間の属性へと拡大し、そこに侮蔑的な意味が挿入されていったことを確認できる。逆に言えば初版編纂の時点では口語レベルで多様な人々を「アジア人」として一括するような他者関係が不在であった可能性を示唆している。

もっとも辞書にない言葉でも実際に使われていた語も多くあるだろう。その一つが、「アジア主義」[aziatstvo]である。当時、予約購読者数でトップランクの『同時代人』誌に1859年に掲載された論文の中で、この用語が用いられている。この論文の文脈では一般にいう地理的な「アジア」ではなく「トルコ，ペルシャ，ヒヴァ，コーカンド」などを念頭においた社会秩序，すなわち「農業発展に敵対的な諸条件の総体」のことを指し、中国は含まれていない[3:749]。このような「発展」の対極にある「停滞」という意味を内包する用法の背後に19世紀前半にか

けてロシア思想界に広く受容されたヘーゲルの世界史認識の影響をみることができる<sup>2)</sup>。

ミヘリソン『ロシア思想と言葉』(初版1912年)

この帝政末期の標準的な慣用表現辞典では次のような用例が示されている。

アジア的慣習 [azia (ya) shchina] : (ヨーロッパ的慣習に対置されるもの、つまり粗野なもの；文明の欠如), アジア人 : 粗野で無教養な人間, 「アジア! : 遅れた民, 遅れた国。用例 : あちら(西欧)では公民的秩序のイロハと見なされていることが、我々にはなじまない。我々はアジアだ。我々はアジアなのだ!」 [5: 10]

この用例の出典はボボルキン<sup>3)</sup>の1895年の作品である。続いてツルゲーネフの『処女地』(1877年)での用例が示されている。

(召使い達は) [女主人の]手に接吻をしに来なかった。このアジア的慣習が廃されて久しい。 [5: 10]

この例文の文脈に即して言えば、召使いが女主人の手に接吻することが「アジア」的な陋習であると見なされている。女性の手に接吻する慣習がそもそもアジアに存在するのかどうかはここでは問題ではなく、その起源がどうであれ上司あるいは目上の者に対して仰々しく敬意を示す儀礼的慣習の是非が問題にされているのである。そのような慣習のあり方がここでは否定的意味を伴って「アジア的」であるとイメージされているのである。

同じ19世紀半ばの作家シチェルビナの用例は次の通りである。

我々とは--ヨーロッパ的な言葉とアジア的な振る舞いである。 [5: 10]

これらの例文は、ロシア人のナショナル・アイデンティティに関わる表現であろう。

総括的に言えば、帝政末期のロシア語表現において「アジア」的なものは、「ヨーロッパ」やそれと同質でかつ一元的な価値をもつ「文明」に対置されており、その意味で自分たちの世界の一部として意識されている。ただしツルゲーネフの用例はやや位相がズレており、直ちに「ヨーロッパ」的価値に対置されるものではない。その場合の「アジア」とは、ある否定的価値を示すために用いられるレトリックに他ならないのである。

これらの帝政期の辞書はロシア革命後もしばらくは使われたが、しかしソビエト期になると次第に規範的性格が極めて強い辞書が編纂されるようになる。その編纂方針の根拠の一つがレーニンの1920年1月18日付「同志ルナチャルスキー宛」メモである [6: VIII]。彼は、ゲーリの辞書について「素晴らしい」が「地方主義的な [oblastnicheskii] 辞書」で「古くさくなった」とみなし「現在も使われ、プーシキンからゴーリキーに至る古典的作家たち>によっても使われている現在の/本物の辞書」(強調は原文のまま)をつくるよう提案した [7: 121-122]。こうして中央集権的権力のもとで帝政時代の知識人の文章語と民衆の口語的世界とのズレの解消が図られていく<sup>3)</sup>。

ウシャコフ『ロシア語詳解辞典』(1934年)

1934-40年に国立外国語・民族語辞典出版所から発行された D. ウシャコフ監修の4巻本のスタンダードな辞典である。19世紀の古典的文学を中心に比較的豊富な用例をもっている。

アジア人 : 1. アジア出身者, 2. (転義) 非文化的で、粗野な人間(植民地諸民族に対するヨーロッパ人の尊大で侮蔑的な態度を土壌にして発生した; 廃語), アジアートカ : アジア人の女性。

アジア的 : 1. アジアの(形容詞), 例 : アジア博物館, アジア・コレラ, 2. (転義) 野蛮な、粗野な(アジア人の第2項の語義を参照, 廃語)。アジア的性格 : (単数) 非文化性, 文化的後

進性, 粗野。[8,1:18]

用例としてミヘリソンと同じツルゲーネフの例文が採用されているほかに、レーニンの次の例文が挙げられている。

カデットたちは、古い権力を打倒することなしに農奴制・恣意・手前勝手・アジア的性格・専制からの解放を夢想していた。[8,1:18]

ヨーロッパ中心主義的で植民地主義的な「アジア人」の語義に「廃語」の宣告がなされる一方、それとはややズレるものの、同じ意味作用を含んでいる「アジア的性格」はまだ廃語指定になっていない。ソ連期の「廃語」とは必ずしも実際に用いられなくなった語というわけではなく、むしろ編纂者が用いるべきでないと思なした語という意味合いが強いといえる。一元的なものと想定された「文化」概念を軸にツルゲーネフやレーニンの用例が前面に出ている。

科学アカデミー・ロシア語研究所編『現代ロシア文章語辞典』（初版第1巻1948年）

「標準/規範的辞書」であることが掲げられたソ連で最も浩瀚な17巻辞典である。ここでは形容詞「アジア的」の見出し語のもとに関連語彙がまとめられている。

アジア的：1. アジアに関する，アジアに固有の，例：アジア大陸，2. (廃語) 非文化的，遅れた，野蛮な，残忍な（革命前の時代の文化的に遅れたアジアの諸民族に対する侮蔑的な態度の名残としての）；

アジア人：1. アジアの原住民，2. (軽蔑的に) 非文化的，遅れた人間について言う語(廃語)；

アジア的慣習・性格[aziatchina, aziatshchina]：文化的後進性，非文化性(廃語)。[9,1:64]

ウシャコフとの違いは、ヨーロッパとの対比の図式が最終的に抹消され一貫して「文化」概念で意味づけている点である。とはいえ意味はほぼ同じである。ここで最終的に「アジア的性格」のレーニンの用法が消去され「廃語」に指定された。

科学アカデミー・言語学研究所編『ロシア語辞典』（初版第1巻1957年）

19-20世紀の文章語の語彙・表現を集成した一般読者向けの4巻辞典である。「ロシア文章語の語彙構成の現状を示す」ことを編集方針としている。

アジア人：1. アジアの原住民，2. 廃語，遅れた粗野な人間，用例：世間では，(亭主が)仕事をすると同じく，家族のことを案ずるものだ。ところが，うちのアジア人，忌々しいワニ[血も涙もない人の隠喩]ときたら，まるで知らん顔だ。セラフィモヴィチ著『天文学』；

アジア的：1. [略]，2. (廃語) 遅れた；粗野な，野蛮な，残忍な。[10,1:15]

ここでは17巻とは異なり「アジア」を意味づける際に「文化」概念を用いていない。「アジア的性格」という語も廃語扱いで「遅れていること，野蛮なこと」と説明され，次のような用例が挙げられている。

わが首相，ココフツォフ[帝政末期の首相]が我らのところ，キタイ-ゴロド[当時貧民窟があった街]にお出ましになった…クレストフニコフやらグチコフやらの名門商人たちに挨拶し，国の将来の文化的統治を約束した…何が信じられるものか。いたるところアジア的性格(陋習)ばかりだというのに。[10,1:15]。

このようないずれも口語的用例の中での「アジア」表象は，廃語とはいえ民衆的な文脈でしかも自分たちの世界との関係の中で意味を醸し出している点が特徴的である。(ちなみに，もっと後の時代の1985年の第3版では，「アジア人」の項目でセラフィモヴィチの例文が挙げられ，「アジア的」の廃語の部分と「アジア的性格」の項目そのものが削除されている。)

科学アカデミー・ロシア語研究所編『現代ロシア文章語辞典』（2版増改訂第1巻1991年）

全20巻の予定で刊行が開始された用例・典拠ともに充実している最大級の辞典である。17巻辞典と異なるのは小見出し語に副詞の「アジア風に/アジア人風に [po-aziatski]」が採られた点である。用例は次の通りである。

町の大半はアジア風に建てられていた。つまり軒は低く屋根は平らである。[プーシキン]  
ひたすら熱気がアジア風に立ちのぼる。それは乾燥したなんともほこりっぽい熱気なのだ。  
[11,1:104]

「アジア的」の語義としては、「アジア産・アジア風の」という意味でグルジアの串焼き肉料理シャシリクについてのプーシキンの次の例文が掲げられている。

我々は昼食にアジア風シャシリクをイギリス製ビールやシャンパンと一緒にとった。[11,1:104]

いずれの場合も「アジア」とは、モスクワやペテルブルグから見た場合のエキゾチックな風物(中央アジアやカフカースの)、しかも具体的で感性的な実物を指し、臨場感あるものになっている。このような文化の多様性を認めるような用法は、すでに19世紀からあったが、これまでに辞典に採られていなかったのである。

とはいえ廃語ではあるが「遅れた、粗野な、残忍な」、「文化的後進性に関わる」、「粗野で残忍で遅れた人々に関わる」という語義も残っている。「アジア人」の用例の筆頭にあるドストエフスキイの『カラマゾフの兄弟』からの例文は敵意に満ちた響きすらもっている。

(あるロシア兵士が) 遠くアジア人たちとの国境で彼らの捕虜になり、彼らにキリスト教を捨てイスラームに改宗することを強いられながらも自分の信仰を変えることに同意しなかった。[11,1:104]

続いて「アジア人」に対する別の関係のあり方を示す文例が示されている。

子猫がラクダから馬に、馬からモンゴル人に跳び乗った。——ブリシ！[ロシア語での猫を追いかう言葉]——とアジア人が言った。[20世紀前半の作家プリシヴィン]

ユカギール人たちはあらゆるアジア人たちと同じく古の民だ。どこからやって来てどのようなコルィマ河の支流にたどり着いたのか——このことを彼らの謡は記憶していない。[19世紀の動物学者ワグネル] [11,1:104-105]

これらの用例での「アジア人」は、それまでの用法とは対照的に明確な他者である。そして後者の2つの例文に出てくる他者は書き手との言語的コミュニケーション関係にある。だがその関係は対等ではなくプリシヴィンの用例では“アジア人がロシア語で言った”のであり、異文化間の言語によるコミュニケーションにおいて不可避免的に作用するヘゲモニー関係の存在を示している。

オジェゴフ、シヴェドヴァ『ロシア語詳解辞典』(1993年)

オジェゴフ『ロシア語詳解辞典』(初版1949年)の第9版(1972年)以降、I. シヴェドヴァの増改訂により21版を重ねてきた1巻本に増補を加え、著者を連名にした新版である。語義として「アジア人たち [aziaty]: アジアの原住民」のほか女性形、形容詞が記載されているだけである。[13:17]

以上、ロシア語辞書での「アジア」表象を見てきたわけであるが、そこではモノの指示から始まりヒトとその属性の指示へと拡張され、そして自己言及と他者言及との間のぶれを内包しながら指示対象への否定的価値評価がなされ、さらにはその価値評価に対する統制が行われるという形で変化してきた姿をばんやりとつかうことができる。それは現実のコミュニケー

ション空間での諸表象の再現というよりも、むしろ各々の時代の中で無数の書き手と読み手によって参照されることが期待された規範としての「アジア」表象の重要な一面である。

### 3. 百科事典での記述

ロシア語で本格的な百科事典が編纂されはじめたのは19世紀後半以降である。かなりのタイトルが未完に終わっている。以下に検討するブロックハウス版以前の完結した事典にはトリー、ゾトフ編『卓上辞書』(全3巻+増補2巻1863-1877年)、ベレジン編『ロシア百科事典』(全16巻1873-79年)がある。20世紀には各種専門別『百科事典』が数多く編纂されたが、本稿では総合的なものに限定した。[14: 735]

#### ブロックハウス・エフロン『百科事典』(初版第1巻1890年)

帝政期ロシアにおける最も権威ある百科事典である。ソ連期には稀覯本だったが、1990年以降、復刻版やCD-ROM版が出され、現代ロシアの「復古」文化の源泉でもある。

アジア関連項目は「アジア局」「帝国科学アカデミー・アジア博物館」「アジア協会」である。それぞれ外務省から見た外国としての「アジア」、アカデミズムにおけるロシアを含む「アジア」、欧米のオリエント学の文脈でのヨーロッパのムスリム地域やアフリカを含む「アジア」といった様々な「アジア」表象が示されている<sup>4)</sup>。

「アジア」の項目の書きだしは「旧世界で最大の大陸、地球上の陸地の3分の1を占め、人類の揺籃の地、最古の歴史的記憶の保管者」[16,1: 214]とある。構成は、「水平的外観」、「垂直的外観」、「水路学」での河川湖沼の概観、「気候と生産」での4つ地域区分(高地東アジア、南アジアおよび南東アジア、北アジア、西アジア)ごとの農業生産中心の概観、「鉱物資源」での貴金属中心に産地の記述があり、続いて「民族誌」「政治的状态」「旧来のアジア調査」「最新の調査」「諸国家と植民地」「文献目録」の順である。全19頁の約半分が19世紀後半以降のロシア人を含むヨーロッパ人による軍事行動を含む探検・踏査を記述した「最新の調査」という項目で占められている。

「民族誌」の項では「言語」による種族・民族分類として「ハイパーボリアンまたは極北住民」「高アジア系またはモンゴル系」「ドラヴィダ系」「マライ系」「中央アジア人種」の5範疇が挙げられ、例えば「アイヌ」については「ハイパーボリアン/極北住民」範疇中の「極東北種族」に含められ「ユカギールとチュヴァシ、チュクチとコリヤークおよびカムチャダール、そしてアイヌまたはクリル人およびギリヤーク」と記述されている。「日本人」と「朝鮮人」は「高アジア系/モンゴル系」の下範疇としての「多音節語」と「単音節語」の中の前者に位置し、「サモエード」「ウラル・アルタイ系」(ツングース派、モンゴル派、チュルク派など)と並置されている。「ウラル・アルタイ系」のうち、ツングース派は、北方の固有の「ツングース」と南方の「満洲」とに区分され、モンゴル派は、東方に固有の「モンゴル」と西方の「カルムイク」、そして「ブリヤート」とに区分される。チュルク派は、4分類され、第1集団にはヤクート、第2集団にはタシケント、ヒヴァなどの東チュルク、第3集団には、ウラル、カザン、アストラハンなどのタタール、第4集団にはトルコないしオスマンが含まれるとされる。「高アジア系/モンゴル系」のなかの「単音節言語」に「チベット人と無数のヒマラヤ諸族」「ビルマ人とビルマ西方および北方の蛮族」「シャム人と近縁の諸民族」「アンナン人」「漢人[kitaisy]」および周辺少数民族が含まれている。マライ系諸族として「フォルモザの沿岸居民」と「フィリ

ピン島のタガログ人」などが挙げられている [16, 1: 219]。この「言語」による民族分類体系によれば、今日の東アジアの諸「民族」は異なる系統として見られているし、現代の諸「国民国家」ヤソ連後の「民族共和国」とも必ずしも重ならない。例えば「ヴェトナム（越南）」はこの『百科事典』では不在である。

言語的区分と並んで「文化圏」的発想にもとづく記述が若干ある。

チベットと西インドシナ諸民族（ビルマとシャムでの）ではインド文化の影響が支配的なものに対して、東方諸民族、トンキン中国人、コーチシナ人、カンボジア人は、完全に中国の影響下にあるのでほぼどこでも中国語を文章語および学術語と見なすことができる。[16, 1: 219-220]

「民族誌」の項目の付録図として別掲【図1】の「アジア諸族」という表題の人物描写が218-219頁の間に挿入されている。「アジア」の頁で唯一の視覚的表象である。全部で23点の人物像のうちで中央の7点が「カルムイク人」の正面・横・上から見た頭蓋骨と独特の服装と携帯品を身につけ同性同士が何か対話している様子の2組の全身像である。これは図版編纂者にとって「カルムイク人」の存在の身近さを示唆するものであり、かつ読者は比較的生き生きとしたイメージを得ることができる。中央下段の「タジク男性」と右下の「チュルク女性（キプチャク女性）」は同一人物の横と正面の裸の胸像である。このような特別な扱い方にこれらの民への編者の特別な態度を読み取ることも可能である。ドラヴィダ系の「トダ人」（左中）と「日本人」は男女両方が提示されている。「日本人女性」（左上）はほぼ正面上半身で「着物」を着て「まげ」に大きな「かんざし」をさし、顔は色白である。「日本人男性」（右中）は右手を腰にあて顔は広く短髪で全身浅黒く「ふんどし」のようなものを腰に巻き「ぞうり」のようなものを履いている。日本人女性の下には中華風ドレスに「纏足」の足を見せて立つ「アンナン人女性」（左中）の全身像が配置されている。この他に「南中国人男性」の着帽胸像（左上）、「ミングレル人男性」の全身座像と「ギリヤーク人男性」の全身立像（左下）、いずれも独特の服装と携行品を身につけている。「ヤクート」（右上）の2名、「サモエード」、「ラップランド」（右中）は毛皮を身につけている。人物像が置かれた位置やその大きさ、右上から左下に向かって打たれた番号などからこの図全体を支配している複数の序列基準を読み取ることができるし、それらの基準は描き手と対象との関係のあり方を暗示するものであり、同時にそれは外見の細密な類型化によって見えない部分までも決定づけようとした19世紀の骨相学や犯罪人類学と同じ性質の眼差しの産物であろう。

「文明」の項目では、最も典型的に「アジア文明」が叙述されている。「文化に関して言えば、アジアの文明的諸民族は、野蛮な民族や遊牧民族に数の面で優っている。アジア文明はヨーロッパ的尺度では決して測れないものの、アジア的教養において優位を占めているのは停滞の原理、魂と感性の面での簡素な生活である。それゆえ内部では互いに違いがあるとはいえアジアの文化的諸民族全体は、多少とも同じような発展段階にある」[1: 220]。この叙述の基底には、単純な未開-文明の図式ではなく、多元的な「文明」観とそれらを貫く一元的な文化の「発展段階」論がある。そのような観点から次のような比較文明論が展開されている。

通常、東洋の諸民族として想起されるのはアラブ人、ペルシャ人、トルコ人であり、彼らにはインド人と中国人が対置される。そして実際にこれらの三つの大きなアジアの文明的諸民族は多くの点で互いに非常に異なっている。いわゆるアジア人には例えば奴隷制度が存在しており、インド人はカーストで差別されているが、中国人には市民的・政治的平等が保持されてい

る。アジア人は宿命論者で運命は不変であるという信仰を決して捨てない。反対にインド人は神に対する自分の行為の責任をはるかに強く感じている。中国人はさほど死後の世界の存在を信じておらず人生においては祖先から継承した極細部に至るまで定められた道徳律で満足している。[16,1:221] (下線は引用者)

ここでは「アジア文明」は三つに分類されており、それぞれの世界観が描写されている。特徴的な点は下線部分である。ロシアから見て「いわゆる『アジア人』とは具体的には「アラブ人、ペルシャ人、トルコ人」のことを指していることがわかる。

この「民族誌」の項の結語は次のように記されている。「これら様々な諸民族の壮大な混交に加え、彼らを支配するヨーロッパ人や原住民と混血したヨーロッパ人の末裔も合流している。このような支配的な民族は、北方ではロシア人であり、南方ではイギリス人とオランダ人である」[16,1:220]。この記述は2重の意味で興味深い。第一にロシア人が「アジア」の外部にいるヨーロッパ人として提示されている点であり、第二に、ある意味で自明のことであるが、アジアを支配する「ヨーロッパ人」が分節化されている点である。19世紀末のアジアでのロシアの競争相手はイギリスとオランダであった。

「諸国家と植民地」の項目には、「ヨーロッパ諸国のアジアの領有」という小項目があり、領有人口順の格付けが示されている。大英帝国を筆頭に、オランダ、フランス、ロシア、スペイン、ポルトガルの順であり、独立国では中国を筆頭に日本、トルコのアジア部、朝鮮、ペルシャ、シャムの順である[16,1:231-232]。「政治的状态」の項目ではアジアは4つの地域に区分される。A)西グループ:1)オスマン帝国、2)アラビアと遊牧諸族、3)ペルシャ、アフガニスタン、ベルチスタン、4)ヒヴァ・ハン国、ブハラ・ハン国、それらの遊牧諸族、B)東グループ:1)日本、2)中国とその支配下・保護下にある地、C)南グループ:1)前方インド:イギリス領インド、イギリス勢力下のネパール、ブータン、ハイデラバード、2)後方インド:イギリス領、フランス領、独立国家としてビルマ、シャム、アンナン、マライ系諸国家、3)英仏領以外のヨーロッパ諸民族領、D)北グループ:アジア・ロシア。[16,1:222]

「諸国家と植民地」での独立国か植民地かによる区分と「政治的状态」での実質的な勢力圏による区分とが微妙なズレを示している。このズレによって引き裂かれているのが「朝鮮」である。読者の目には朝鮮は言語、国家としては存在していても「政治的」に存在しないものとして提示されていた。全体としてヨーロッパによって植民地化される地域としてのアジアとの対比の中で、ロシアはその前者として明確に位置づけられている。

#### ブロックハウス『補巻1』(1905年)

ブロックハウス百科事典の「補巻」で初出の見出し語は4種類の「アジア」関連雑誌名と「アジア・ロシア」である。そこには「ロシア帝国のアジア大陸に位置する部分、シベリア、中央アジア領、カフカス地方を含む。…」とある。「アジア」の項目では、「最近の政治状態の変化」として「対中国戦争(1894-95年と1900年)の後、日本にフォルモザ島とペスカドル[ポンフー]諸島が移譲され沿岸部分がヨーロッパ諸国(ロシア、イギリス、ドイツ、フランス)に割譲された。米西戦争後にスペインはアジアの植民地(フィリピン)を失った」と記され、その結果としてアジアでの領有面積順(人口順ではなく)の格付けが示されている。1位はロシア領、続いて中国、ブリテン領、7位にオランダ領、8位にフランス領、9位はシャム、11位に日本、12位に北アメリカ合衆国、13位に朝鮮の順である[16,1d:45-46]。アジアにおけるロシアの存在の大きさを印象づけるこれらの記述を補巻に見出した読者は革命の騒乱のなかで日露戦争の結果



の知らせを聞くことになる。

### ブロックハウス『小百科事典』（第2版第1巻1907年）

先のブロックハウス百科事典をコンパクトにまとめたこの『小百科』での新出項目は「アジア的」という形容詞であり、その意味は「アジアに固有の、野蛮な、粗野な」と説明されている。この記述が言語辞典での語義の説明ではなく百科事典での然るべき「知識」の一部である点に注目すべきである。「アジア」の項目での大きな特徴は、アジアの住民が3つの異なる指標で分類されている点である。第一の分類法は「人種」であり、ハイパーボリアン（含むアイヌ）、モンゴル（中国、満洲、日本、朝鮮…）、マライ、ドラヴィダ、地中海人種の5集団からなる。第二の分類法は「言語」であり、北方、南方、中央（日本、朝鮮、中国の単音節語を含む）、カフカスの4集団からなる。第三の分類法は「文化水準」で、「野蛮な狩猟・漁労で暮らす北アジアの諸民族」、「氏族的生活習慣をもつ遊牧民」、「様々な知的・政治的發展段階での定住」である[17,1:55-57]。これらの『小百科』での記述は、より通俗化されているが、それだけより多くの読者を想定して記述されたものとして重要な意味をもっている。

### グラナト『百科事典』（第7版第1巻1910年）

ブロックハウスの競争相手のグラナト社が手がけた事典であり、革命後に「ソビエト百科」社に移管しながらも1948年までに全58巻を刊行した[18:177]。「アジア」の項目以外の「アジア」の形容詞を冠する項目は「アジア協会」、「アジア系外国人」である。「アジア協会」の項目のブロックハウスとの相違は、従来の欧米の学会に加えて「帝国ロシア地理学協会・東シベリア支部（1851年、イルクーツクで設立）および西シベリア支部（1877年、オムスクで設立）」が含まれ、国際オリエント学大会（1873年発足）への参加が言及されている点である[19,1:483]。この事典以降のソビエトの百科事典からはこの項目は消滅するが、これはソ連アカデミズムの欧米オリエント学との関係を暗示しているといえよう。この事典で初めて採用されたのが次の「アジア系外国人」の項目である。

アジア系外国人、すなわちアジア諸国家の臣民は、わが国の法律によればロシア臣民を妻帯している場合には祖国に帰るためにロシアを出国する際に妻子を同伴することはできない（第1部第10巻第88条）。アジア系外国人自身は2年以内の期間に限りロシア臣民に登録されている妻のもとを離れて出国することができる。2年以上にわたって不在の場合には、婚姻は解消されたものとみなされる（第1部第10巻第89条）。[19,1:484]

百科事典の項目にこのようなアジア人男性の民事に介入する差別的法律规定が掲載された意味は大きいと思われるが、さらに比較法的な検討を要する問題である。

また「アジア」の項目はブロックハウスの構成とほぼ同じである<sup>5)</sup>。

### 『大ソビエト百科事典』（第3版第1巻1970年）

全30巻の百科事典であるこの『大ソビエト百科事典』はソビエト・アカデミズムの知識の集大成であると考えてよい。1920-47年に初版全66巻、1949-58年に第2版全51巻が刊行されたが本稿では検討しなかった。東洋学者への弾圧を含む1930年代のソ連での「アジア」表象をめぐる問題は特別に論じる必要がある。以下に重要な項目に限って検討してみよう。

まず「アジアの生産様式」の項目である。周知の通り、この用語が1853年のマルクス-エンゲルスの往復書簡とマルクスの論文「インドにおけるブリテン支配」で用いられ、「1857-1859年の経済学草稿」[いわゆる『要綱』]の「資本主義に先行する諸形態」で展開され『経済学批判』（1859年）の序文へとつながり、その後『資本論』、『反デューリング論』でも論じられ、最後

にモルガンの古代社会研究への注目へと導かれたことなどが説明されている。ロシアでの動向に関しては次のように記されている。

19世紀末から20世紀初頭のマルクス主義文献では《アジア的生産様式》範疇の一層の解明は見られなかった。若干の例として G. V. プレハーノフの著作では《アジア的生産様式》は《古典古代的生産様式》と併存する独自の発展類型であると解釈された。V. I. レーニンの著作では《アジア的生産様式》はマルクスの社会経済的構成体論との関連で言及されるものの、レーニンは特別に検討しなかった。1920～30年代の論争ではマルクスの社会経済的構成体論の理解は深まったが、その中の《アジア的生産様式》範疇の意義と位置は然るべき形で解明されなかった。《アジア的生産様式》論争は本質的には未完に終わり、60年代初頭以降に初期階級社会全体を対象にして再開された。[20,1:279]

つまりソビエト国家の公式イデオロギー＝マルクス・レーニン主義の歴史観の鍵概念である「社会経済的構成体」論において「世界の最も広大な部分」にかかわる「アジア的生産様式」範疇の位置と意味が定まらなかったのである。30年代の「東洋学」への弾圧がこういう形で影響を及ぼしている可能性もあるが、さらに検討を要する問題である<sup>9)</sup>。

「アジア」の項目（全12頁）の書きだしは次の通りである。

アジア：（ギリシャ語の Asia），アッシリア語の asu——東に由来するものと推定される。世界の最も広大な部分（全陸地面積の約30%），ユーラシア大陸の一部…。[20,1:282]

ここで初めて「ユーラシア」という用語が登場する。1920年代、そして1990年代ロシアの政治思想の鍵概念である「ユーラシア」という用語の検討は別稿を要する<sup>7)</sup>。「I. 一般データ，II. 自然，III. 地理学的研究史，IV. 住民，V. 政治的区分」という構成のうち約6割を自然地理的記述が占めている。民族誌的区分については「言語」を基準に詳細な系統分類表が提示されている<sup>8)</sup>。とくにソ連時代に東アジア，東南アジアの住民の言語的差異についての認識が深まった結果が表れている。「地理学的研究史」の項目では非ヨーロッパ人の研究者（第二次大戦前の軍事利用を目的とした日本人の東アジア研究など）の業績が言及されている[20,1:291]。「政治区分」の項目では「ヴェトナム」が「ヴェトナム民主主義共和国」と「南ヴェトナム」，「朝鮮」が「朝鮮人民民主主義共和国」と「南朝鮮」という形で併記され「日本」の面積の注で「ボニン〔小笠原〕島（1968年に日米合意により日本に返還された）および合衆国に占領された琉球諸島（面積2200km<sup>2</sup>，人口95万2000人）を含む」とある。地域区分としては、「東アジア」には「中国（大部分），朝鮮，日本」，「中央アジア」には「モンゴル人民共和国と中国の一部」とある。その他に「合衆国は台湾島——中華人民共和国の領土を占領した（1950年）。合衆国の軍政下に日本の琉球諸島（沖縄本島を含む）が置かれている（1951年以降）」と記されている[20,1:293]。これらは「冷戦」時代のソ連の公式見解であった。

『ソビエト百科事典』（1980年）

ソ連初の1巻本百科事典で、大衆啓蒙のための卓上事典としての性格をもち120万部発行されたものである。アジアにおける政治対立を浮き彫りにする次のような記述に注目したい。

アジア開発銀行：その活動は原資の50%以上を拠出している帝国主義列強の支配下にある[…]

アジア太平洋会議：APEC，1966年設立。アジアの社会主義諸国，極東および太平洋西部の民族解放運動に対抗する地域的政治同盟。構成国は日本，オーストラリア，ニュージーランド，タイ，フィリピン，マレーシア（1973年まで），南朝鮮，台湾，南ヴェトナム（1975年5月まで）。

[21:26]

また「アジア的生産様式」の項では、1960年代以降の論争は「明解な決着が得られなかった」と簡単に記されているだけである [21:26]。

### 『大百科事典』(1991年)

ペレストロイカ期に編纂され、ソ連崩壊直後に200万部発行された2巻本の百科事典である。同じプロホロフ編集の『ソビエト百科事典』との相違は「アジア開発銀行」の項目での次のような記述への変更である。「アジア太平洋諸国の開発計画への長期融資のための地域的国際銀行。[...] 1987年以降ソ連はアジア開発銀行年次総会にオブザーバーを派遣している」。また新出項目として「アジア大会: アジア諸国の総合スポーツ競技大会 [...]」[23,1:23] とある。そして「アジア太平洋会議」の項は消去された。いずれもゴルバチョフの「新思考外交」による新しい国際関係を反映している。「アジア」の項目は自然地理的概観と国名の列挙だけである。注目すべきは、「言語」を基準とした民族誌的分類の記述が消滅した後に、新たに身体的特徴を基準にした「人種」分類が登場している点である。

アジア・アメリカ人種: モンゴロイド人種を参照せよ。[23,1:23]

モンゴロイド人種: (アジア・アメリカ人種), 人類の大きな人種のひとつ。黄色がかった肌, 黒い直毛, 薄い眉髭と体毛, 低い鼻, 平板な顔つき, 突き出た頬と蒙古襞を特徴とする。東アジア, インドシナ, 中央アジア, シベリア, アメリカに分布する。[23,1:830]

### 『図解百科事典』(1995年)

このロシアで最初のカラー図解百科事典(5万6000部発行)では「アジア」という語を含む見出し語は「アジア」だけである。内容はすべて自然地理的記述であり、関連する図版として別掲《図2》の上から順に「《ストルボフ》地区のレナ河」「ヨルダン南部の典型的風景」「アフガニスタン北部のヒンドゥクシ山脈」というキャプション付きの写真が挿入されている [24:16]。目で見える「アジア」表象は、ここではシベリアと西南アジアの自然の景観である。

### 『大百科事典』(増改訂第2版1997年)

初版では2巻本だったがこの版では1巻にまとめられた。しかし発行部数は1万部で、出版事業におけるアカデミックな知識の凋落を象徴している。ここにはもはや「アジア的生産様式」の項目はない。「アジア」の項目は、自然地理と国名の列挙のほか初めてアジアの地図が掲載された。その際、注記として次の5つの国際紛争地域が示されている。インド・パキスタン国境のカシミール地方の帰属、朝鮮半島の南北の境界線、イスラエルに占領されたパレスチナ領、国連総会決議に反するインド洋の英国領(チャゴス群島)、国連総会・安保理事会決議に反して併合された東チモールである。国名の大きな変化は旧ソ連から独立した国々と「大韓民国」が新出したことである。[25:22-23]

全体として帝政期に比べソビエト時代の百科事典での「アジア」表象は、自然地理的でありかつ政治的である。帝政期には「アジア」という包括的範疇のなかで記述されていた歴史・民族誌的内容は各国別項目の中に埋め込まれ、時代を下るにつれて百科事典での「アジア」の統一的なイメージは希薄になっていったと言えよう。

## 4. ポスト・ソビエト時代の「東アジア」

これまでに検討した百科事典以外に、大衆レベルでの「アジア」表象の源泉として学校教科

書・参考書類での記述の検討が必要となるが本稿では扱わない。またマスメディア一般での表象の検討も重要であるが筆者の能力を超える課題である。以下では、ソ連崩壊後に急速に成長した大衆文化にみる「東アジア」表象の一面面を検討して今後の研究の手がかりにしたい。

#### 4.1 観光グラビア誌『東アジア』

ウラジオストクで出版された観光グラビア誌『東アジア：冬97-98号』[26]は写真イラストをふんだんに用いた全81頁カラー印刷である。筆者がウラジオストク市内の土産物店で65ルーブリで購入した。発行元は株式会社「ダリー」、編集長はレオニド・ポプコフで執筆陣には3名の「著名なオリエント学者」の名が記されている。「ダリー」社は、本誌以外にウラジオストク市内の電話帳、観光ガイド、医療保健施設案内、学校案内といった情報誌を発行している。いわば海外旅行ガイドともいべき本誌の広告クライアントは、ウラジオストク市内の旅行代理店および近郊の保養施設であり、外国企業としてはハルビンの旅行社とプサンの印刷会社それぞれ1社が目される<sup>9)</sup>。

表紙〈図3〉には、白地の空間の中央にうずくまるひとつがいの猿の写真がある。写真修正の効果により全体として猿の表情はうつろな印象を与えている。この猿の表象を編集長の巻頭言と関連させて読むことができる。

初雪の息吹が感じられる。白き雪に囲まれてニホンザルたちは物憂げだ。彼らはロシア的現実のせいで茫然となった人々に似ている。彼らにはもうかれこれ半年も前から給料が支払われていない。未だ全国民挙げてのどんちゃん騒ぎ（マネーゲームという意味での）の余韻さめやらぬ遠きモスクワでは、新たな税金が考案されているのだ。...流行っているのは、テニス、五つ星のホテル、ユニセックス、君主主義思想だ。由緒ある貴族の家系の数がもの凄いで増えている。そんなに貴族がいたのであるならば、いったいどうしてモスクワで革命が成就したのか、理解に苦しむ。[26：1]

この文章に従えば、表紙の物憂げな「ニホンザル」の形象は、そのままミゼラブルなロシアの（モスクワではなく、ウラジオストクの）庶民の心象風景として解釈することができる。ここには、モスクワとウラジオストクとの政治的・文化的ギャップが象徴的に提示されている。例えばテニス＝エリツィンらの政治エリートのパフォーマンス、ホテル＝「新ロシア人」と呼ばれるニューリッチ、ユニセックス＝若者文化、君主主義思想＝復古思潮、さしあたりこのような首都のトレンドを連想することもできる。編集者は、貴族ブームにも批判的だ。

ここで注目したいのは「サル」の形象が、19世紀にもっていた意味から、転倒とまではいかないが、ねじれている点である。クルトネ編ダリーの辞書によれば「サル」とは、原義の「サル、キヌザル、オナガザル、その他の種」のほかに、複数形として増補分で次のように記されている。

サルたち：罵倒語として、日本人たちのこと。[用例]〈見てみる、なんてキャッキヤと大声を張り上げているんだ、サルめ!〉。原住民やロシア人、中国人も、彼らをほかでもなくサルと呼んでいる。[1,2：755]

この用例の文脈はさらに検討を要するものであるとはいえ、『東アジア』というグラビア誌の表紙に掲げられた「ニホンザル」の表象は、一面で「日本人」の隠喩として読解することもできよう。とはいえ他面で編集者の言説はそれを極東ロシアの住民に逆投影させるものとなっている。しかも、その場合、「日本人」の意味はもはや19世紀的な侮蔑的なものではない。『東ア

ジア』というタイトルの観光グラビア誌が発行されること自体、極東ロシアでの「東アジア」に対する新しい態度が生まれたことを意味している。編集者の「巻頭言」には、次のように書かれている。

北からの季節風が吹き、白き領域をうむことなく広げていく。時代そのものが新しいページをめくる。そして、その名は『東アジア』。それは、この急速に変わっていく地球上の一部分の、民族的な色彩と新しい経済的可能性を秘めた将来有望なカクテルの価値がわかる人々のための新しい雑誌だ。中国、韓国・朝鮮、日本、東南アジア諸国、そしてロシア極東は、あなたを待っている。[26:1]

ここには停滞ではなく急変する「東アジア」の価値を肯定的に認め、そこに積極的に参与していこうとする態度が明示されている。「北からの白い領域の拡大」という含蓄ある比喩は、必ずしも単純な拡張を意味していない。例えば、連載コラムの前書きは次のように述べている。

東洋とはデリケートな問題だ。知性の面では我々の兄弟であるが、文化の面で我々の兄弟ではない——日本人、朝鮮人、中国人たち行動を的確に評価し理解することはロシア人にとってどんなに難しいことなのかについて議論を始めると大抵はこのような判で捺したような結論で締めくくられるものである。だがすでに我々極東のロシア人たちは、歴史的運命によって東アジアの古い諸文明の末裔——モンゴロイドたちに全面包囲されているという状況におかれている。しかも、かつては我々の隣人たちの謎めいたメンタリティを認識することは、個々の知識人だけが運よくできたものであったとすれば、今日では、新しい経済的現実のなかに置かれた多くの指導的地位にある人々、経営者、一連の買い出し旅行者、東洋に関わる仕事をしている人々が極めて実利的な意味で関心をもっていることなのである。本誌は、東洋の難解な文化現象に関する開かれた率直な情報を知りたいというロシア市民の切迫した欲求に応じて連載コラム《我々はいかに多様であるか》の欄をもうけることにした。[26:74]

ここには実利的動機にもとづく異文化理解の姿勢がある。しかしおそらく専門家が執筆したと思われる第1回目のコラムでの東洋の暦の話は伝統的なものが過度に誇張されている。異文化についての言説が、日常的なものから切断された「伝統的なもの」を過剰に再生産してしまう傾向はここでも観察できる。

同誌の構成は、韓国、朝鮮、日本、中国、タイに関する観光案内と、沿海地方の保養施設の紹介、海外レジャーツアーの旅行代理店と価格の一覧（渡航先は、オーストラリア、ヴェトナム、ハワイ、インドネシア、マレーシア、中国、サイパン、シンガポール、合衆国、タイ、朝鮮、韓国、日本）と海外ショッピング・ツアーの一覧（渡航先は中国、タイ、トルコ、韓国、日本）、中国の料理と風習の記事、先述の東アジアの暦に関するコラム、クロスワードパズルの順である。とくにクロスワードは様々な分野での「東アジア」についてのステレオタイプを知る上で興味深いがここでは触れない。全体として韓国、朝鮮、日本、中国、タイに関する頁にはアカデミックな抽象的・概念的記述ではなく、実際の体験に裏付けられた実利的な情報が満載されている。例えば入国ビザ・税関、電話・交通網、料理、チップの慣習、宿泊施設、貨幣などである。中国でのマナーや朝鮮のアンダーグラウンドの歌謡曲「ヒ・パ・ラム」の情報など両国とロシアとの結びつきの深さを示している。例えば「中国は共産主義国であるから、もしあなたが《トンズィ [同志]》——タヴァーリシという言葉しか知らなくても困ることはない。この呼びかけの言葉は男女に関係なく使うことができる。ちなみにこれには革命的ないしイデオロギー的なニュアンスはない」[26:28]という記述や「ピョンヤンの伝統的な公式訪問のプログ

ラムには、あまり面白くないもの（部分的にはイデオロギー的動機による）が含まれている一方で、通常、面白そうなものは含まれていない」[26:7] という記述である。

挿入された写真も、観光名所だけでなく日常風景を多く取り入れているし、カメラマンと編集者の眼差しの有り様を示している。例えば日本の頁で言えば「海岸の消波ブロック」の写真〈図4〉に「海岸のブロックはしばしば海の風景の美を“台無しにしている”」というキャプションがつく。読者の異国情緒を満足させる「仏教墓地」「托鉢僧の行列」「9800円の異国のフルーツ[ドリアン]」「阿寒湖アイヌコタン民族資料館・熊の家」とともに「車窓から見る一戸建て住宅」「カプセルホテル」「旅館の内装」「和式の風呂」「居酒屋の風景」「札幌駅の改札」「新宿のネオン街」に視線が注がれている。また「百科事典」では均質な空間として表象されていた「日本」の内部の差異にも観察がおよぶ。

日本は99%の日本人から成っている。民族的マイノリティは、アイヌ(数万人)、朝鮮人(約70万人)、中国人(約7万人)、そして沖縄人[okinavtsy](100万人)である。沖縄人は日本人とは言語、容貌および生活様式の面で異なっている。[...]同じ漢字の発音は日本の南北で非常に異なっており、遠い県にすむ住民は互いに意思疎通が困難である。[26:14]

他方、「日本では水道水の品質が非常に良く、安心して飲むことができる」[26:17] という記述は逆にウラジオストクの水事情を物語っているし、「過労死」「カラオケ」「降雪時の東京の交通麻痺」「普通の店より価格が高い免税店」などが紹介されている。

もちろん「フジヤマ」「ミカド」「ゲイシャ」といった伝統的なステレオタイプを想起させる写真も含まれる。とは言えこのグラビア誌には新しい「東アジア」表象が満ちあふれており、それらの表象はロシアにおけるツーリズム、とりわけショッピング・ツアーを介して不断に更新され大衆化されつつあるといえる。これらに加えラジオ、衛星放送での視聴覚表象がリアルタイムで流入している。次に取りあげるロック・グループの場合、国境越えた電波が、そしてインターネットが、ロシアにおける新たな「アジア」表象の源泉になり、またそれがさらに新しい「アジア」表象を創出していく事例である。

#### 4.2 ロック・グループ「ムミー・トローリ」

ウラジオストク出身の音楽グループ「ムミー・トローリ」は、1999年9月16日に函館のロシア極東国立大学函館校の開校記念イベント「日ロック」での公演が10月2日にNHKのBS-2で放映され、マスコミでの「ロシアのGLAY」といった比喩も含め、ロシア音楽の東アジアでの受容という問題を考える上で興味深い題材であるがここでは立ち入らない。本稿がロシアにおける「アジア」表象という観点からこのグループに注目するのは、彼らがウラジオストクで誕生しながらもロシア語文化圏で大ヒットし、モスクワ・ペテルブルグ中心の芸能界に「衝撃」を与え、「極東の現象」としてロシアのマスコミの話題になっているからである[27]。観光グラビア誌がどちらかという中高年層を読者として想定できるのに対し、「ムミー・トローリ」の場合は若年層を中心としたポップ・カルチャーの一事例として考察することができる。

はじめにグループのヴォーカル・作詞作曲を担当するイリヤ・ラグテンコを中心に彼らの経歴を概観しながら、現代ロシア文化の中での彼らの位置を確認しておこう<sup>10)</sup>。

モスクワで1968年に生まれたイリヤはまもなく家族と共にウラジオストクに転居し少年合唱団の一員として各地を巡業した。同時に日本からの電波で聴いたロックの影響を受け、1979年に英語(外国語)で歌うロック・グループのヴォーカルとして活動をはじめる。ちょうどアフ

ガン戦争が始まった年である。彼はテレビでのインタビューのなかで次のように語っている

僕はずいぶんチジョールイ（重い）・ロックを聞いたよ。それは僕の理解でいうとディープ・パープル、レインボー、クイーン…こんなの。ソビエト・ロックを知ったのは外国のロックよりも、たぶん、ずっと後になってからのことだね。ソビエト・ロックがあるなんて考えもしなかったからなんだ。…そう、最初のレコードだったのは、やっぱり、あれはマシーナ・ヴレーメニとアクヴァリウムかなあ。[38]

このエピソードから分かるように創成期のソビエト・ロックは、ある程度ローカルな性格をもっていた<sup>11)</sup>。アクヴァリウムなどのレニングラードのグループの音（彼らは現在ではロシア・ロック界での古典となっている）を知ったイリヤはそれまでのグループを解散し、1983年に再び新しいコンセプトに立って「ムミー・トロリー」を結成する（この名称は北欧神話の英雄やミイラのように瘦せてひからびたヴォーカルが吟唱するというイメージを醸し出している）。最初の本格的なレコーディングは「いかにも1984年当時ふさわしく、すべてが真夜中に厳格な陰謀的な態勢でおこなわれた」[28]。ペレストロイカ前夜のソ連で「ロック」というジャンルはまさしくアンダーグラウンドな文化であった。そしてこの年に次の時代の前兆となるチェルノブイリ原発が爆発したのである。彼らの曲は85～86年にウラジオストクのディスコティックで大ヒットし各地に伝えられた。だが86年に極東国立大学の学生集会で彼らはイギリスの黒魔術的なヘヴィーメタル・バンド「ブラック・サバス」などとともに「社会的に最も危険なグループ」[28]として名指しで批判され、彼らの音楽はディスコティックで禁止された。1987年にグループはウラジオストクの映画館で演奏を行ったが、その翌日にメンバーは2年間の兵役に徴募されてしまう。兵役中もイリヤは作品を書き続け、除隊後の90年に新しいアルバムを発表するものの不振に終わる。「ペレストロイカ末期に社会派プロテスト・ロックの波が押し寄せ、ムミー・トロリーは控えめに言えば冷遇されたのである」[30]という。イリヤはグループを解散し中国に向かう。彼は極東国立大学東洋学部で地域研究を学び露中関係史を卒論テーマに選んでいた。中国行きは「普通の交換留学」によるものだったが、「彼はロシア語、英語、中国語の間のありとあらゆる組み合わせの通訳の仕事をし、定期的にはバーテンダーなどとして働きながら合間をみて歌を書いた。その中の一つが有名な『女の子』である」[31]。旋律の軽快さとは対照的にこの歌の詞の内容は決して明るいものではない。

真夜中に突然、女の子が目覚めた/それは、ちょっと近づき難い感じの子/彼女は、ほんのちょっぴり怒っている/枕元は一面血塗れた/私、裏切られたの、と言った/…/彼女のボーイフレンドは遠く七つの海に/他の軽い娘たちの果汁を飲み彼女たちに歌を唄っている[いちゃいちゃしている]/たぶん全てこんな風に不実なのかもしれない/… [34]。

ソ連崩壊以降、出稼ぎのために海外に渡航する人々が急速に増加した。そのような新しい現実のなかの一コマの状況、あるいはもっと大きな状況全体が詠まれているといえる。イリヤは2年間、中国に滞在した後、ロンドンに移り通訳の仕事で生計を立て始める。96年に紆余曲折のすえにロンドンのスタジオでレコーディングし、翌97年4月に最初のCDアルバム『モルスカーヤ（海洋的）』に続き、セカンド・アルバム『イクラー』を発表しロシアでデビューするや否や、瞬く間に様々な音楽メディアのチャートのトップに躍り出たのである。98年には音楽雑誌の年間最優秀賞やモスクワでの年間最優秀ロック・グループに与えられる「オヴァーツィヤ」賞を受け、年末にミニ・アルバム『新年おめでとう、おちびさんたち!』を発表する。99年にはロシアだけでなくロンドン、函館、中国で公演している。以上のような彼らの音楽経歴や作品

全体が醸し出すイメージは、国境を超えた海洋的なものによって彩られており、ロシアの思想界に伝統的な「大陸的」(現代の有力な政治思潮である「ユーラシア主義」の鍵概念のひとつ)イメージと鋭い対照をなしている。

続いてマスコミでのイリヤの言説を検討することで現代ロシアでの「アジア」表象の別の側面とそれに関連する新しいアイデンティティのあり方を見てみたい。

ある雑誌インタビューでは次のような対話がなされている。

記者：君は自分をどう感じているのかなあ、ヨーロッパ人？それともアジア人？/イリヤ：僕は自分を極東人[dal'nevostochnik]だと感じているんだ。[…]/記者：どこが違うのかな、モスクワ子と極東人とは？/イリヤ：まずはじめはアクセントだね。住んでいるところが違うよね。[29]

19世紀以来、ロシアの知識人たちはヨーロッパとアジアの狭間で自分のアイデンティティ獲得のために格闘してきた。それは、特殊でありながらも普遍的な価値をもつはずのものとしての「ロシア的なもの」あるいは「ソビエト的なもの」の探求の過程であった。そして21世紀前夜にはポップ・カルチュアの中にローカルとはいえ開かれている新しいアイデンティティが浮上し始めている。続いてインタビューでの話題は「極東」のイメージへと発展していく。

記者：極東人だからこそ、アルバムに『イクラー[魚卵]』なんてロマンチックじゃない名前をつけることができたんだね。/イリヤ：もし君がイギリス人と極東について話をしたとしよう。彼らが連想するのは、なぜか台湾、中国、その他の現代世界の経済的ドラゴンたち[新興工業地域]なんだ。こんなふうにすべては色々な面から見ることができるんだ。イクラーだって、漁業の面からじゃなくて、解剖学的な視点からだって見ることができる。ただたんに眺めることだってできる。ところでロマンチックじゃない名前について言えば、…僕からすればすべてが「イ」って言葉で始まるんだ。これって、すでにロマンチズムと無縁じゃないだろ。[29]

記者が投げかけるステレオタイプ、つまり極東といえばイクラー=魚卵(おそらく店頭のサケやチョウザメの魚卵の缶詰が念頭に置かれているのだろう)という連想に対して、イリヤはイギリス人の例を出してそれを異化し、拡散させようとしている。ロシアにおいて「極東」といえば、ロシアの極東(沿海地方、ハバロフスク地方、アムール州、サハリン州、カムチャツカ州などを含む)のことでロシアの海産物の半分以上を供給する地方として9学年用『地理』の教科書に記されている。他方、中国などは「外国のアジア」の中の「東アジア」に含まれると10学年用の『地理』で教えられている。ある意味で記者の連想は教科書的には正解だが、イリヤからみてそれは一つの見方にすぎない、というわけである。

旧ソ連のほぼ全域で聴くことができるモスクワのラジオ放送「ヨーロッパ・プラス」の番組でのインタビューでは、DJ との対話の中で浮き彫りにされるステレオタイプとそれへの異議申し立てが興味深い。

DJ：ところで聞きたいことがあるんだけど、いったいロシア語の音の響きはイギリス人たちにどんなふうに受け取られているのかなあ、君はどう思う？ロシア語って彼らにとって音楽的に聞こえるのかなあ、それとも反対に途切れ途切れに聞こえるのかなあ、ほらちょうど僕らからすればドイツ語みたいに。/イリヤ：音楽的に聞こえるんじゃないの。…僕からすれば中国語だって音楽的だよ。/DJ：ということは、君は中国語を専門に勉強していたわけだ。/イリヤ：そうじゃなくて、単に言語ってそういうものじゃないの…。[30]

音楽性をめぐって英語、ロシア語、ドイツ語を格付けしようとするDJに対して、イリヤは中



国語の例を提示した上で、そういった格付けの発想自体を無意味化させている。

上に見てきた例は全国レベル、あるいはモスクワ中心のメディアでの談話であった。そこでの「アジア」「極東」といった表象はある意味で抽象的である。そこでは「極東人」というアイデンティティを意味あるものとして提示することができた。しかしウラジオストクという東アジアに隣接している場所ではこのアイデンティティはどういう意味をもつことになるのだろうか。新聞『ウラジオストク』紙でのインタビューでは、極東ロシアに隣接しかつ数多くそこに出嫁ぎに来ている中国人との関係に関心がむけられている。

記者：君の専攻を中国方面へと向けたのはママかい？/イリヤ：ちがうよ、ママとおばあちゃんは僕を別の方へ向けようとしてきたんだ。つまり僕が家族の伝統をつなげ建築家になることを望んでいたんだ。けれども僕が学校で勉強したのは中国語でそれを何も変えなくなかったんだ。/記者：君は、中国人たちとはうまくやっているかい？/イリヤ：彼らは働き者だよ。[ロシアの人々が]誰も何もせず無為に過ごしている時に、中国人たちはすべてのものを山のように生産しているんだ。ウラジオストクは、僕にはそもそもロシア的 [rossiiskii] というより、むしろアジア的 [aziatskii] に見えるよ。[32]

このように極東での談話の中ではイリヤのアイデンティティは、いっそう肯定的に意味づけられた「アジア」のほうに傾斜している。それは、表面には出てこないけれども記者の言説の中に含まれている暗黙の中国人に対する特定の見方、そのような見方を共有しているウラジオストクの「ロシア人」(エトノスとしての russkie だけでなく) たちのもつある種の雰囲気に対する批判的な姿勢を示唆しているように見える<sup>12)</sup>。このようなイリヤの姿勢に対して記者は、イリヤがロンドンで通訳の仕事で生計を立てながら音楽活動をしていることを念頭に置きながら、次のように質問している。

記者：ウラジオストクに留まって暮らすつもりはないのかな？/イリヤ：僕はウラジオストクで暮らしているよ。だけど同時にあらゆるところでも生活しているんだ。理想を言えば、すべてのバリアー、囲い、境界を取り外したいし、あらゆる区別を消し去りたいんだ。[...]もし、僕に仕事とかすべてを世話してくれる場所があったらそこに留まるよ。よかったら一緒にウラジオストクを、みんなにとって好い場所、運転手が道の穴凹を迂回しないですみ、市長と州知事が争うことなく、ミュージシャンには良いスタジオと経験ある録音スタッフがいて、画家には筆と絵の具があり、船乗りには大きな白い色の船[海洋迷彩色のグレーの軍艦でなく]がある、そういうところにしようよ。今のところ僕は模索中なんだ。[32]

ここにはローカルでありながらも、境界のないグローバルなあり方を志向する彼特有の自己イメージがある。それでは、彼の音楽活動の根拠地ロンドンでの言説はどうであろうか。BBC ラジオの番組「ピックベン」(海外向け放送)でのインタビューで「ムミー・トロリー」は「なぜロンドンをひいきにしているのか？」と質問されている。これに対してイリヤは、創作でもコンサートでも特にロンドンをひいきにしているわけではないと答え、次のように語っている。

僕らがまもなく収録しようとしている次のアルバムは、事実上、ここ半年の間に道すがらに創られたものなんだ。それは、ペトロパヴロフスク-カムチャツキイからカリブ海の島々に至るまで途方もない数の場所でなんだ。歌が書かれたのはこんなに広大な地理の中でなんだ。たぶん、それぞれの場所はロンドンも含めて何らかの固有のチャームっていうか、精神をもっていると思うよ。[33]

ここでもイリヤはロンドンを中心化、特権化しようとする BBC のアナウンサーの言説に異

議を唱え、それを相対化させるために広大な地理的空間を対置させている。その中ではロンドンも無数の魅力ある地点のひとつであるというわけである。イリヤは、自分のいる場所を中心化しようとするメディアの思考様式に対して別の場所を対比させることによって、そのような思考を異化させており、これはそのままそのメディアの視聴者・読者へのメッセージにもなっている。他方でこれらのインタビューを総合的に（それはインターネット上で可能なことであるが）眺めてみると、出発点はウラジオストクではあるが他にいくつかの根拠地があり、そこに留まりつつ、またそこを中心にすることなく逃れ流浪していくことで、何らかの形で区別、線引きをしようとする力に抗するという生き方のイメージを提起している。これは彼らの曲『逃げる』（「逃げる、門のところで僕らを偏執狂が待ちかまえている/僕らを留め金にくくりつけようとしたがっている…」と歌詞が始まる曲）のメッセージでもある [35]。

最後に函館公演後のインタビュー記事《図5》を検討してみよう。

記者：あなたたちは日本公演から戻ったばかりですが、かつて君は次のようなこと認めていましたよね。つまりグループ〈ムミー・トロリー〉は東ヨーロッパの文化の中から生まれたけれども日本のヘヴィー・メタルによって育まれたんだと。このような極端な組み合わせを日本人自身はどのように受けとめたんでしょうか？ 実際あなたたちは地元住民だけを前にして演奏したわけですよね。/イリヤ：たしかに、僕らはロシア語がわかる聴衆を前に演奏したわけじゃなかったよ。それでも日本人たちのロシア観とロシア・ロックのイメージ全体をひっくり返したように僕には思えるんだ。僕にとって個人的に最もうれしかったのは日本へ持っていったレコードの山が全部売れたってことだね。[36]

ここでも他の箇所でも記者はロシア語が分からない日本人に果たしてイリヤの歌が理解してもらえたかどうか、つまり言語の壁は越えられないんじゃないか、共通の言葉を見つけるのは難しいのではないか、という固定観念を投げかけている。これに対してイリヤはレコードが完売だったと応酬している。つまり気に入ってもらえたというわけである。そしてチケットが2日で売り切れ、熱狂的なファンがロシア語でリフレインを合唱したことや電子メールで日本からファンレターが来ること、それを今度は彼が辞書を引きながら読んでいること、公演では日本語で『女の子』を歌い、日本語で挨拶したことを語っている。もう一つ重要な点は、日本人たちの「ロシア」についてのステレオタイプの存在が強く示唆されていることである。モスクワの記者にはそれは明示されていないが、それは極東の住民には強く意識されていることである。

本稿で検討した資料のなかでマスメディアの側からは、絶え間なく、より東方に位置するものを周辺化することによってそれぞれの自分のいる場所を中心化しようとする言説が投げかけられている。これに対する解毒剤としてイリヤが提示する「アジア的なもの」は、その相手に応じて「極東」「ウラジオストク」「中国」等々と姿を変えている。そのような彼の言説の異化作用が「アジア」表象の新しい意味を産み出していることは確かである。同時に、その意味の新鮮さがまたマスコミとその読者・視聴者の興味と消費の対象ともなっており、そこでもまた新たな意味が生まれていることにも注意を払う必要がある（例えば「読者の声」や「ゲストブック」など）。

以上がマスメディアの次元でのイリヤ・ラグテンコのプリズムを通して見た「アジア」表象であったとすれば、続いて「ムミー・トロリー」の音楽活動の中で提示されている諸表象を検討する必要がある。

『論拠と事実』紙は、「ムミー・トロリー」の作品の雰囲気について次のように書いている。「トロリー」の作品には、中国的な旋律も、イギリス的なレアリア（風物）もない。歌われる形象は、鮮明でなじみ深いものであり、時代精神に合致したものだ、[「アイロニーに満ちた調子」、[「血塗れの主題」、[「デビット・ボーイのような非ロシア的な身のこなし」、[「ミック・ジャガーのセクシャリティ」と形容される彼らのイメージは「アジア的なもの」とはほど遠い [27]。だが実際に彼らのビデオやCDを視聴してみると、実はところどころに「アジア的な」アイテムがちりばめられている。例えば、コンサート・ビデオに収録されている「中華人民共和国の中央直轄都市出身の女の子を思いながら」という曲の演奏を見てみよう。

そこではイリヤは右手に「でんでん太鼓」をもち、左手と身体全体で「カンフー」のような構えをとるパフォーマンスを見せている。そして観客に向かって「でんでん太鼓」を激しく振りながら、ステージの端から端まで駆け抜け、演奏の最後には（モスクワのお客に）中国語で「シェーシェー、ラ（どうもありがとう）」と結んでいる。日本語で「でんでん太鼓」と書いたが、それは「撥浪鼓」または「博浪鼓」と書く中国のおもちゃである。「撥浪」には「左右に揺れる/振る」、[「博浪」には「野放図、不謹慎」の語義があり彼のパフォーマンスとともに歌詞のイメージに対応している。歌詞自体も地名の「シャンハイ」、船の「ジャンク」、東アジア特有の植物「スイカズラの香り」などのレアリアが含まれると同時に、中国語の言葉の音がそのままロシア語の歌詞の中に挿入されて、「純粋なロシア語」からはほど遠いものになっている。

メイファ [梅花] はおとぎの国の美しさをもつ、すもも [スリーヴァ=李]/みんなを自分の美の一隅に追い込んでいる/受け技はひとつ残らず正確だ/愛の格闘技、ワンスイ [万歳]!/首都の水晶のような風景の中でバオドゥン [抱蹲 (=失業する)]/僕は心の居場所を探し求めている/今日、君の奸計の謎が解けた/シャグア [傻瓜 (=愚人)] かもしれないし、賢人かもしれない。 [37]

例えば、このようにそれぞれの音と意味がからみ合いながら独特のイメージを創りだしている。この曲はモスクワとベテルブルグのFM放送「ラジオ・マクシム」のチャートで1998年8月から9月にかけて2週連続1位を獲得した。このようにロシアのポップ・カルチャーの表面にはっきりとした外と内の境界をもたない新しい表象が模糊として浮かび上がってきているのである。

## 5. 結びに代えて

本稿で考察した資料での19-20世紀初頭の「アジア」表象は、当初、何らかの実体を反映したものというより遠い異質の他者についてのぼんやりとしたイメージであったが、そこに知識人たちの明確な特定の価値基準が持ち込まれることにより「粗野」「遅れた」等々の否定的なイメージへと変化している。このような表象を提示した知識人たちの意識の中に別の他者（ヨーロッパ）がはっきりと存在していたことを確認できる。とはいえ、そもそもこのような表象に触れることのできた読者はごく限られていたことも指摘しておく必要がある<sup>13)</sup>。ソ連時代の「アジア」表象は帝国アカデミズムが提示したステレオタイプとは明らかに異なる側面をもっていた。また本稿では取り扱わなかったソビエト時代の「アジア」に関する様々な政治的言説、つまり反帝国主義民族解放闘争の場として規定された「アジア」（そこには日本は含まれたり、含まれなかったりする）、「プロレタリアート」と「農民」が「民族資本」と提携することを要求され

た「アジア」の諸表象を想起する時、欧米の植民地本国での「アジア」表象や、ソ連以外の左翼知識人たちによって共有された独特の「第三世界」としての「アジア」表象との重なりやズレの問題に今後注意を向ける必要がある。本稿の後半では20世紀末のロシア大衆文化のなかに断片的ながらさしあたり2種類の表象を拾い上げてみた。もちろん、これらはアカデミックな文化における表象とは次元を異にするものであり、しかももともとローカルな性格をもっているものであった。しかしながら、これらはソ連時代には外部から観察できなかった種類の文化現象である。それは観光・ショッピング旅行という大衆的な経験のなかで必要とされ生み出され、ポップ・カルチャーの流行とともに浮上してきたオーディオ・ビジュアルな「アジア」であった。このような新しい大衆文化が勃興している状況のなかで登場した新しい表象は一部の現象にすぎないかもしれないし、他方、旧来のアカデミズムの「アジア」表象は依然としていつでもどこでも参照可能なものとしてレファレンス類のなかに存在し続けている。これら次元を異にする新旧の諸表象の並存状況が、今後どのように変動していくのか注目していく必要があろう。いずれにしろインターネット上で閲覧もコミットも可能なものとして開かれている新しい多様な諸表象を、歴史教育および異文化理解教育におけるマルチ・メディア教材の開発の中で積極的に活用していくことが今後の課題である。

## 注

1. 日露を中心にした比較文化・交流史研究は膨大な蓄積があり、また現在も進行中である。ここでは、「アジア」とロシアに関する先行研究として、東アジア地域における「ロシア」ファクターに関する米・露・日・韓の国際的学際的共同研究としては [39]、18世紀以降の個々のロシア知識人の「地理学的」言説におけるヨーロッパとアジアの境界線とそのイデオロギー的含意を検討した [42]、バフチン理論を援用しながらアジア起源の「飲茶」文化が19世紀ロシア文学のテキストのなかで重要な役割を果たしていることを論じた [40] などを参照した。
2. この論文の著者チェルヌィシェフスキイの「アジア」認識についての先駆的研究としては、渡辺雅司「革命と民衆—チェルヌィシェフスキイの共同体論の複眼的構造」、金子幸彦ほか編『ロシア解放思想の先駆者—チェルヌィシェフスキイの生涯と思想』（社会思想社、1981年）がある。また同じ時代に C.ソロヴィヨフの「アジアとヨーロッパの闘争」という歴史図式に異議を唱えた N.ダニレフスキイ [4: 254-256] にも注目したい。この時代に、ヨーロッパを「アジアの半島状突起物」とみた地理学的認識については [42: 9-10] を参照。
3. 地方主義 [oblastnichestvo] とは政治用語であり、「通常は辺境の地方で自らの郷土の文化・経済的自立性を高めることを目指した革命前のブルジョワ自由主義的社会潮流、地方分離主義、例えばシベリア地方主義」[8, 2: 650] と定義されている。邦訳『レーニン全集』第35巻1964年473頁の「地方語辞典」ではイデオロギー的含意が伝わらない。
4. 各項目の概要は次の通り。「アジア局：外務省の三つある内局の一つで、その管轄は、1. 東洋に関わる政治的事項、2. 東洋の諸政府とのすべての通信全体、および東洋におけるロシアの大使・領事との通信全体、東洋に在留するロシア臣民に係る事項、同じくロシアに在留する東洋諸国の臣民に係る事項、東洋に在留する人物のロシアに対する諸関係、3. 諸官署と政府要人のための通訳、同じく個別的要請に応じた東洋の諸言語の法令・諸文書の翻訳である。この局の管轄下に《東洋語教育部》があり、東洋におけるロシアの使節および

領事のための通訳養成を目的としている」[16,1:232]。管轄地域には「東洋」以外に「バルカン半島の諸国家」も含まれていた[17,1:55]。この局は1832年の外務省設置以前から機能していた由緒ある官署であり、その他には東洋以外の外国との関係を管轄する「内地交流局」と「人事管財局」、「大臣官房」などがあったが、1897年の改編でアジア局は第1局に改名された[16,37:361; 16,3d:187]。外務省にとっては「アジア」は外国のことであるが、当時のロシアには内なる「アジア」もあった。「帝国科学アカデミー・アジア博物館」は、「アジアの諸民族とロシアの異族人[russkie inorodtsy]、その生活・言語・歴史の研究」のための資料を統合するための博物館である。そこでの図書分類は「1 欧文献、2 極東諸語文献(中国語、満洲語、日本語)、3 サンスクリット…」と続くが、朝鮮語文献は範疇として見いだせない。アカデミーに保管されていたピョートル1世の収集物をもとに東洋学者フレンとアカデミー総裁 S. S. ウバーロフの協力でルソーのアラブ古文書コレクションの購入を機に1818年に同博物館が設立され、1837年の民族学博物館の分離以降、碑文を含む文書中心の収集になり、学者の蔵書やアジア探検隊が収集した古文書が寄せられた[16,1:232-233]。そして1930年にはこの博物館をもとにソ連科学アカデミー・東洋学研究所が組織され1991年にロシア科学アカデミー・東洋学研究所に移行して現在に至っている[24:22]。「アジア協会(複数) [aziyatskie obshchestva] は、「ヨーロッパのムスリム地域およびアフリカを含むアジアの歴史・地理・民族誌・宗教・言語・文学を研究する目的をもつ学術団体の特別なグループの名称」とされる。その最初のものがパリでオリエンタリストたちによって1822年に設立された「アジア協会」である。1823年にはロンドンで「王立アジア協会」が、1844年にドレスデンで「ドイツ東洋協会」などが設立された。アメリカでは1842年にボストンで「アメリカ・オリент協会」が設立され、当時のイギリスの植民地に設立された団体の言及もあるが、ロシアに関する記述はない。[16,1:233]。欧米のオリент学とロシアの東洋学との関係の問題は今後の課題としたい。

5. ちなみに、地名表記がブロックハウスとは次の点で異なっている。「カムチャツカ海」に代わって「アレウト [アリューシャン] 諸島」に囲まれた内海「ベーリング海」が新出し、「北シナ海」に代わって新出の「リウ-キウ」と「フォルモザ」に囲まれた内海「黄海と東シナ海」が登場する点である[19,1:485]。「人類学的構成」の項目は言語による分類という点では同じだが指標が多少異なる。a)「単音節語」をもつ民族(漢、ビルマなど)、b)「膠着語」をもつ民族(ドラヴィダ、日本、朝鮮、チュルク・タタール系、満洲・ツングース系、モンゴル系、フィン系、サモエド、ハイパーボリアン系(ユカギール、チュクチ、カムチャダル、ギリヤーク)、エニセイ、アイノ、マライ・インドネシア諸民族、c)「屈折語」をもつ民族(セム語族、インドゲルマン語族)である[19,1:502-503]。このように言語を基準とした民族区分は、かなり相対的なものだった。
6. 1983年の『哲学百科事典』では、レーニンとプレハーノフ、ローザ・ルクセンブルグとの論争が言及されている。「レーニンはこの範疇[アジア的生産様式]を資本主義的發展行程に踏み入ったロシア史に適用することに反対し」、「アジア的専制」を経済での「家父長制的・前資本主義的特徴と商品経済および階級分化の未発達」という指標で規定したとされている。「アジア的生産様式」論争では、ヴァルガらのアジア的生産様式を一つの主要な社会経済的構成体であるとみなす見解、第二にアジア的生産様式は未だ検証されていないか、または歴史的存在として否定されるべきであり古代東洋社会は奴隷制社会、東洋の中世社会は封建制社会の変種、東洋的専制はヨーロッパ絶対主義の類似物とみなす見解、第三にアジア社会を奴隷制と農奴制が結合した「初期封建制段階での停滞」[1983:15]とみなす

見解が鼎立したという。また「マルクスの最後の研究はアジアの生産様式の基礎—農業共同体に関わっていた。彼はその歴史的位置と本質を『V. I. ザスーリチの手紙への回答』（1881年）のなかで特徴づけていた」[22: 14-15]とされる。周知の通り、この手紙は「マルクス主義者」と「ナロードニキ」との論争の中でロシア社会の現状分析に関わるものであり、「アジア的」共同体が資本主義を経過せずに社会主義へと移行する拠点となりうることを示唆していた。

7. 現代のイデオロギーについては、G.ジュガーノフ（佐藤優/黒岩幸子訳）『ロシアと現代世界：汎ユーラシア主義の戦略』自由国民社、1996年を参照。Europa と Asia を組み合わせ Eurasia という用語を最初に提唱したのはオーストリアの地質学者 von Eduard Suess（1831-1914）であり、1897年に帝国アカデミー編『ロシア語辞典』に Evraziya として採用された [9, 3: 1223]。この用語のもとで土壌分布や動植物相、様々なエトノスの一体性を主張したユーラシア主義の形成については [42: 15] を参照せよ。
8. その概要は以下の通りである。「インドヨーロッパ語族」の下集団としてインド系、イラン系、スラヴ系、ギリシャ、アルメニア、ピロビジャン・ユダヤが配置される。ここで初めてアジアの住民として「スラヴ系（ロシア人、ウクライナ人）」が加わったが、まだ「ベラルーシ」は「民族」として認知されていない。続いて「カフカース語族」、「セム・ハム語族」（下集団として「イスラエル・ユダヤ」を含む）、「ウラル語族」、そして「アルタイ語族」である。「アルタイ語族」の下に「チュルク系」「モンゴル系」「ツングース・満洲系（極東少数民族—エヴェンキ、エヴェン、ナナイ、ウリチ、オロチ、ウデヘ、オロッコ、満洲、オロチョンなどを含む）」と並んで「朝鮮人」「日本人」「アイヌ」「エスキモー（アレウトを含む）」が配置された。それまで独立系、またはモンゴル系として位置づけられていた朝鮮人と日本人が「アルタイ語族」に包摂された。ツングース・満洲系以外の極東少数民族（チュクチ、コリヤーク、イテリメン、ユカギール、ニウヒ）は「古アジア諸民族」範疇で括られた。こうして神話の起源をもつ「ハイパーボリアン」範疇は消滅する。漢人は「漢・チベット語族」の5つの下集団（漢系、チベット・ビルマ系、タイ系、ミャオ・ヤオ系、ヴェトナム系、モン・クメール系）の一つとなる。最後に「ムンダ語族」「ドラヴィダ語族」「オーストロネシア（マラヤ・ポリネシア）語族（31のエトノスから成る「インドネシア系」を含む）」である [20, 1: 289]。このエトノス分類の日本での受容の問題も今後検討される必要がある。
9. 広告およびPR的内容の誌面を業種、企業所在地、総誌面に占める割合を算出した結果、保養施設が6施設で全体の7.6%を占めている。そのほとんどはウラジオストク市近郊に位置するサナトリウム・家族向け保養施設のPR誌面である。「囲み広告」の中で最も多い社数・件数が旅行社の4社（8件）で全体の1.6%を占め、次にラジオ放送局2局（2.2%）、印刷会社1社（2.4%）、広告代理店1社（1.6%）、出版社1社（1.2%）、ホテル1軒（0.8%）となっている。
10. 以下のムミー・トロリーに関する情報は彼らの公式ホームページによる [27-33]
11. 「マシーナ・ヴレーメニ」は1960年代末にモスクワでA.マカレヴィチによって結成されたバンド。「アクヴァリウム」は1970年代前半にボリス・グレベンシチコフを中心にレニングラードで活動を始めたバンド。両者が初めて出会ったのは1976年のタリン（エストニア）でのポップ音楽祭であった。イリヤが聞いたレニングラード系のロックの中には1981年にアジア系のヴィクトル・ツォイ（1990年事故死）が結成した「キノー」などがある。
12. 例えば東洋諸言語を学ぶ「白い」学生たちを「バナナ」と呼ぶような雰囲気のことである。

「バナナ」は、筆者が1999年6月にウラジオストクで採録した隠語であるが、黄色のイメージや人をモノで呼ぶことなど侮蔑的な意味と同時に、熱帯産の「バナナ」はロシアでは高級品であることから上昇志向への揶揄などが考えられるが、はっきりしたことは言えない。

13. ここでの表象は知識人読者のものであり、民衆の中での表象も研究される必要がある。例えば、東方の理想郷「白水境」についての旧教徒たちのイメージについては中村喜和『聖なるロシアを求めて』（平凡社、1990年）を参照されたい。

本稿は、平成10～11年度科学研究費補助金・基盤研究(A)の成果の一部である。

- 1: Даль, В. И. *Толковый словарь живого великорусского языка*. Репринтное воспроизведение издания 1903-1911 гг., под ред. И. А. Бодуэне де Куртэнэ. В 4 т. М.: Прогресс-Универс, 1994.
- 2: Даль, В. И. *Толковый словарь живого великорусского языка*. В 4 т. М.: Русский язык, 1989-1991.
- 3: Чернышевский, Н. Г. *Сочинения в 2-х т.* Т.1, М.: Мысль, 1986.
- 4: Данилевский, Н.Я. *Россия и Европа: Взгляд на культурные и политические отношения Славянского мира к Германно-Романскому*. 6-е изд., СПб.: Глаголь, 1995.
- 5: Михельсон, Н. И. *Русская мысль и речь: Свое и чужое: Опыт русской фразеологии: Сборник образных слов и иносказаний*. В 2 т. Т.1. М.: ТЕРРА, 1994.
- 6: Бабкин, А. М. "Толковый словарь В. А. Даля", Даль В. И. *Толковый словарь живого великорусского языка*. Т. 1, 1989, с. V-XIII.
- 7: Ленин, В. И. "А. В. Луначарскому", *Полное собрание сочинений*. Изд. 5-е, Т. 51, с. 121-122.
- 8: *Толковый словарь русского языка*. В 4-х т., под ред. Д. Н. Ушакова, М., 1934-1940.
- 9: *Словарь современного русского литературного языка*. В 17 т. М.-Л., 1948-1965.
- 10: *Словарь русского языка*. В 4 т. М.: ГИС, 1957-1961.; 3-е изд., 1985-1988
- 11: *Словарь современного русского литературного языка*. В 20 т. 2-е изд., Т.1, М.: Русский язык, 1991.
- 12: *Сводный словарь современной русской лексики*. В 2 т. М.: Русский язык, 1991.
- 13: Ожегов, С. И. и Шведова Н. Ю. *Толковый словарь русского языка*. М.: Азъ, 1993.
- 14: Якушева, Г. В. "Энциклопедия", *Книга: энциклопедия*. М., 1999, с.732-736.
- 15: Белов, С.В. "Брокгауза и Ефрона издательство", *Книга: энциклопедия*. М., 1999, с.115.
- 16: *Энциклопедический словарь*. Ф.А.Брокгауз и И.А.Ефрон. В 86 т. СПб., 1890-1907. Репринт. воспроизведение. М.: ТЕРРА, 1990-1994.
- 17: *Малый энциклопедический словарь*. Ф.А.Брокгауз и И.А.Ефрон. В 2 т. 2-е изд., СПб., 1907-1909. Репринт. воспроизведение. М.: ТЕРРА, 1994.
- 18: Белов, С.В. "Гранат издательство", *Книга: энциклопедия*. М., 1999, с.177.
- 19: *Энциклопедический словарь*. Гранат. 7-е изд. Т.1-55,57-58. М., 1910-1948. Рипринт. изд., Т.1, М.: Васанта, 1993.
- 20: *Большая советская энциклопедия*. Изд. 3-е. Т.1-30 и алфавитный-именной указ., М., 1970-81.
- 21: *Советская энциклопедическая словарь*. М.: Советская энциклопедия, 1980.
- 22: *Философская энциклопедическая словарь*. М.: Советская энциклопедия, 1983.
- 23: *Большой энциклопедический словарь*. В 2 т., М.: Советская энциклопедия, 1991.
- 24: *Иллюстрированный энциклопедический словарь*. М.: Большая Российская энциклопедия, 1995.
- 25: *Большой энциклопедический словарь*. Изд. 2-е пер. и доп., М.: Большая Российская энциклопедия, 1997.
- 26: *Восточная Азия: иллюстрированный журнал-путеводитель Зима 97-98*. [Владивосток, 1997?]
- 27-33: [url:www.mumijtrill.com/articles.html](http://www.mumijtrill.com/articles.html)

- 27: В. Полупаков, "Поп-музыкант от "Мумий Тролля"", *Аргументы и факты*. №6, 1998.
- 28: История Мумий Тролля в датах.
- 29: В. Полупаков, "Дальневосточник Илья Лагученко", *Я молодой*, №13, 1998.
- 30: Интервью ИЛ радио Европа-Плюс: 27 Июня 1999 г. С Илья Лагученко беседует Роман Олегов.
- 31: Юрий Яроцкий, "Лагученко против экологии Китая", *Живой звук*, 12/1997.9.
- 32: Дмитрий Михайлов, "Я Илья из "Мумий Тролля"", *Владивосток*, 14 Июня, 1997.
- 33: Радиоинтервью в программе Биг Бен (Лондон), 8.05.1999.
- 34: Мумий Тролля, "Девочка", *Морская*, Утекай Звукозапись, 1999. (с) 1983-96 Мумий Тролля/1988 Декада Паблишинг/1998 Фамилия Паблишинг.
- 35: Мумий Тролля, "Утекай", *Морская*, Утекай Звукозапись, 1999. (с) 1983-96 Мумий Тролля/1988 Декада Паблишинг/1998 Фамилия Паблишинг.
- 36: Виталий Бродский, "Илья Лагученко будет подпевать хор японских девушек?", *Комсомольская правда*, 1 октября, 1999. с.18.
- 37: Мумий Тролля, "В думах о девушке из Города Центрального Подчинения КНР", НА КОНЦЕРТЕ МУМИЙ ТРОЛЛЬ 17/18-1998-ДЕКАБРЬ: Официальный бутлег Мумий Тролля с Горбушки, Утекай Звукозапись, 1989.
- 38: [url:fans.om.ru/mtroll/report50.htm](http://url:fans.om.ru/mtroll/report50.htm) (Флагмент интервью ИЛ ТВ-6)
- 39: S. Kotkin and D. Wolff, ed., *Rediscovering Russia in Asia: Siberia and the Russian Far East*. Armond, New York, 1995.
- 40: Тэрухиро Сааки, "Чаепитание в представлении Пушкина и Достоевского", *Japanese Slavic and East European Studies*. Vol. 19. 1998, p.165-191; его же, "Чай общения и чай уединения", *Независимая газета*, 4 Июня 1998, с. 11.
- 41: *Русский традиционный костюм. Иллюстрированная энциклопедия*. СПб., 1998.
- 42: M. Bassin, "Russia between Europe and Asia: The Ideological Construction of Geographical Space", *Slavic Review*, Vol. 50, N.1, 1991, pp.1-17.

## 図 版 出 典

- 1: *Энциклопедический словарь*. Ф.А.Брокгауз и И.А.Ефрон. Репринт. воспроизведение. Т. 1, М.:ТЕРРА, 1990.
- 2: *Иллюстрированный энциклопедический словарь*. М., 1995. с.16 (с) Научное издательство "Большая Российская энциклопедия".
- 3,4: *Восточная Азия: иллюстрированный журнал-путеводитель Зима 97-98*, обложка, с. 14.
- 5: *Комсомольская правда*, 1 октября, 1999, с.18.

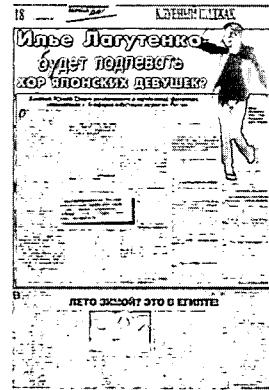




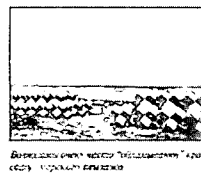
1



2



5



4

## **О представлений "Азии" в России**

Тосиюки Симосато\*

### **АВТОРЕФЕРАТ**

В данной статье освещаются исторические изменения представлений "Азии" в лингвистических и энциклопедических словарях в России второй половины 19в.–20в., и также современные представления "Азии" в журнале-путеводителе "Восточной Азии", который издается во Владивостоке, и в презентаций одной современной популярной рок группы "Мумий Тролля", которая выступает не только во Владивостоке, но и в Москве, в Санкт-Петербурге, в Лондоне, и даже в Японии и в Китае. В результате выяснено то, что наряду со стереотипами "Азии" 19-го века появляются новые представления в популярной культуре.

---

\* Division of Social Studies